

*** 乗鞍コロナ観測所 10周年(1959年)に配布された記念品**

東京大学東京天文台乗鞍コロナ観測所は1949年(昭和24年)に開設された。まだ戦後間もない頃で物資が乏しい中、幾多の困難を乗り越えての建設であった。観測記録は1949年10月15日から始まっているとある。今年(2009年(昭和84年))である。乗鞍コロナ観測所60周年に当たる。天文月報1959年11月号には乗鞍コロナ観測所10周年と緯度観測所創立60周年の記事が載っている。緯度観測所は1988年、東京天文台、名古屋大学空電研究所の太陽電波部門とともに国立天文台になった。時は流れ、時代はめぐる。そして今年度をもって乗鞍コロナ観測所の共同利用は終了することが決定されている。この気象の厳しい高山で頑張った兵どもが夢の跡はどうなっていくは未だに定かではないが、最後の年度の観測が始まっている。こんな折、乗鞍コロナ観測所10周年記念の品(写真1)が出てきたのも何かの因縁であろう。筆者が1961年(昭和36年)、岡山天体物理観測所に就職した頃、この記念品が待機室の机の上であり、今は亡き清水実氏のタバコの吸殻で一杯になっていた。そうなのである、この記念品は灰皿なのである。



写真1 乗鞍コロナ観測所10周年記念の品

この記念品は乗鞍コロナ観測所 10 周年記念式典の折に配布されたものであろうから、当然ながら乗鞍岳山頂の摩利支天岳山頂に立てられたドームを模ったものである。実際の姿からいくらか灰皿用に姿を変えているようだが、真冬に雪氷と戦った梯子が象徴的である。

裏面には、東京大学東京天文台乗鞍コロナ観測所 10 周年記念 1959 の文字(写真 2)が読める。



写真 2 記念品の灰皿の裏面に刻まれた文字
ドーム部を外せば、何の変哲もない灰皿(写真 3)になってしまう。



写真 3 ドーム屋根を外せばただの灰皿

天文月報 1948 年 12 月号には、千場 達氏の「乗鞍観測紀行(1)」、1949 年 1、2 月合併号には千場 達氏の「乗鞍観測紀行(2)」、1950 年 6 月号には、野附誠夫氏（初代乗鞍コロナ観測所長）の「乗鞍岳コロナ観測所と越年試験観測」、そして 1959 年 10 月号には、野附誠夫氏の「乗鞍コロナ観測所 10 周年を迎えて」、1959 年 11 月号には清水一郎、森下博三、河野節夫、代情 靖の各氏による「乗鞍コロナ観測所 10 周年によせて」という記事があり、苦闘の様子が書かれている。筆者は乗鞍より高い、ハワイ島マウナケア山頂での「すばる」の建設期を 4200m の高山に通ったが、その苦労をはるかに越えた苦難の連続であった事が伺われる記事である。

写真 4 は、この記念品のモデルのドームの現在の姿である。



写真 4 モデルの現在のドーム

写真 5 は、冬季の乗鞍コロナ観測所である。左端のドームが記念品の原型である。

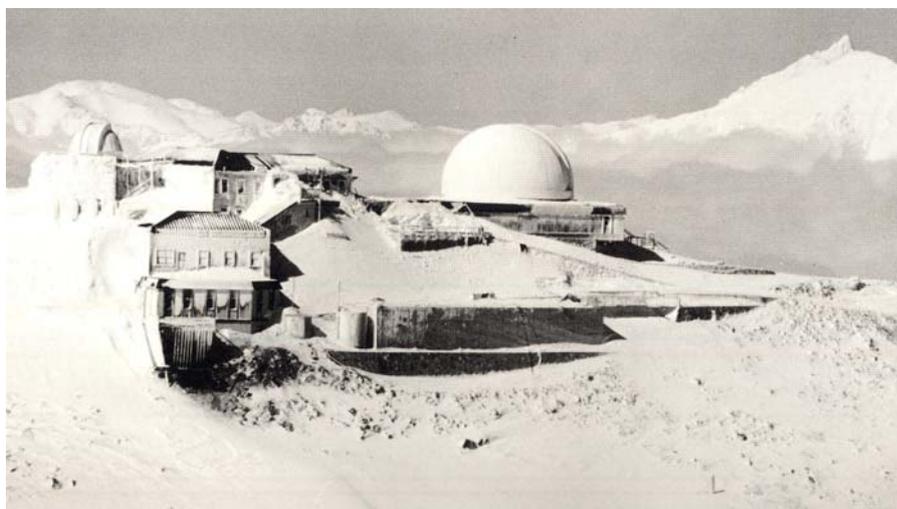


写真 4 冬季の雪に埋もれた乗鞍コロナ観測所